

第3回南部圏域の地域包括を考える会（なんケアの会）を開催しました

開催日時：平成28年6月10日（金）18:00～19:15

会場：南部市民センター なんぴあ

参加人数：95名

メインテーマ：「地域包括で認知症を支える」

サブテーマ：「記憶の話～認知症を理解するために～」

「地域包括で認知症を支える」をメインテーマとしたなんケアの会は、今回で3回目を迎えました。今回は、一般参加として地域の方々の参加も募り、一般参加34名と介護事業所関係者や医療機関関係者、薬局の皆様等、計95名と大変多くの方にご参加いただき、我々スタッフも喜びを感じています。

今回は当院院長の皆河崇志先生より「記憶の話～認知症を理解するために」についての講演を頂きました。記憶の呼称とその特徴や、記憶の三つの要素「記銘」・「保存」・「想起」がどのように行われるのかなど、記憶のメカニズム・記憶障害について学ぶことで、普段目の当たりに行っている認知症の中核症状と周辺症状に対する理解が深まりました。これまでもケアの中で課題とされてきた向精神薬や身体拘束の問題点についても、その理由を改めて考えさせられ、講演の中での「一つ一つのエピソードは記憶に残っていないらしいのに、そのエピソードにまつわる感情は蓄積されていく」という言葉に表されるように、接し方の配慮が必要であることをより一層感じました。

参加者の皆様からは「とても勉強になった」「認知症の高齢者の症状とメカニズムが理解できた」とご好評いただくと共に、今後、「認知症の方への具体的な接し方について事例を含めて教えてほしい」、「アルツハイマー型、パーキンソン型などについて絞った話を聞きたい」等、多くのご要望もいただきました。

次回からはメインテーマを「リハビリテーション」とし症例検討を予定しています。引き続き、地域の方々との連携を深められるよう取り組んでいきたいと思っておりますので今後ともご指導ご支援頂きますようお願い致します。



講演：記憶の話 “認知症を理解するために”

要旨

記憶のメカニズムと認知症の記憶障害について述べた。

記憶の基本的なメカニズムは、軟体動物であるアメフラシからヒトに至るまで同じである。短期記憶は神経シナプス間の神経伝達物質の増加により成立し、長期記憶は新たなシナプスの形成（ネットワークの強化）により成立する。

記憶は非陳述記憶（意識できない記憶）と陳述記憶（意識できる記憶）の二つに分けることができる。動物における種の進化と同様に、非陳述記憶が進化する過程で陳述記憶が成立したと考えられている。陳述記憶においては、側頭葉の内側に存在する海馬が必要不可欠な存在であり、ヒトの海馬が両側ともに障害されると、新しい出来事を記憶できない状態が生涯続く。しかし、線条体（特に尾状核）、小脳、扁桃体が機能していれば、運動や技能の学習能力は保たれ、さらには生活環境に適応するために必要な記憶、そして情動を伴う記憶（これらを非陳述記憶という）も保たれることが知られている。

アルツハイマー型認知症においては、海馬が最も障害されやすい部位であることから、記憶障害が最初の症状として現れることが多い。記憶障害はリボーの法則に従い最近の記憶から徐々に失われ、最終的には古い記憶も失われる。このように陳述記憶が失われる過程にあっても、アルツハイマー型認知症の患者さんが新しい環境（例えば入所した施設）に徐々にではあるが順応できるのは、非陳述記憶が保たれているためと考えられる。また、出来事の記憶は失われても、出来事に対する感情が残り、それが蓄積されていく現象も説明できる。我々医療・介護の関係者は、認知症の患者さんにこのような記憶が維持されている可能性があることに考慮して患者さんに接するべきである。したがって、残された記憶を抑制する向精神薬は極力控えるべきであり、情動を介して深く記憶に刻まれると考えられる身体拘束もできる限り行うべきでない。